

一章

「では、本日はこれにて解散ということでは……」

法会を締めくくると、檀家が次々と席を立ち始める。何事もなく終えることができたこと、胸をなで下ろす。人前で話すのには慣れてはいるが、今日は違った意味で緊張させられた。大きな失敗こそせずに済んだが、説法の間、不審な素振りを見せていなかっただろうか。

溜息をつく。全身が熱く、頬が紅潮している。誰かに悟られてしまっていないだろうか。風邪気味かな、ぐらいに解釈してくればいいが。

「いやあ、住職殿。本日も素晴らしいお話でした。不肖私、感服致しましたぞ」

声の主は、人里でも有数の地主だった。つるりとはげ上がった頭とたつぷりした顎肉の目立つ、肥満気味で胴長短足の中年男だ。揉み手をしては、細い目をさらに細めた笑顔を浮かべている。

大黒様のような見た目をしているが、商売でのやり口はかなり悪辣だと聞く。人をはめ、貶めることを誰より得意にしていると。白蓮を見る目にも、好色と侮蔑が込められていた。はつきり言って印象は悪い。とはいえ無碍にも扱えない。彼の権力は命蓮寺の檀家中で際だっている。寺の運営面でも、様々な面で便宜を図ってもらっていた。

「……で、今度の行事に関して、少しばかりお話ししたいことがあります。少しお時間、よろしいですか？」

「はい、そういうことでしたら、客間へご案内致します。……星、悪いけれど、片付けの指示を任せてもいいかしら」

男は露骨に声を落とした。人目をばかす話をしますよ、と言わんばかりだ。そう来ることは分かっていたので、すぐ側にいた星に声をかけた。彼女は一瞬、眉根を寄せる。

「分かりました。しかし聖、体調が優れないようですが。何でしたら、私が代わりに話そうかがっておきますが」

「気持ち嬉しいけれど、私しか分からない件だから。それより、誰も客間に近づかないように人払いしておいてね。内々の話だから」

「はあ、分かりましたが……」

まだ訝っているようだったが、無理矢理会話を断ち切った。男を、寺の奥へと案内する。星の表現は婉曲的だったが、黒い噂のある悪徳地主を大事な住職と二人きりにさせたくなかつたのだろう。そういった心遣いがある。とはいえ、代わってもらおうわけにはいかなかった。彼との関係について、例えば誰であっても知られるわけにはいかないのだ。連れ立って廊下を歩く。白蓮の一步後ろから、男がついて行く形だ。

「つ……」

不意に、彼女の体がぴくりと反応し、立ち止まる。

男は、こともあるうに白蓮の尻に手を伸ばしていた。ゆつたりとした法衣の上からでも分かるほど豊かな尻を、当たり前前のように撫でている。丸い臀部の形をなぞるように。

「困ります、このようなところで」

「おっと、これは失礼」

注意すると、すんなり手は離れた。悪びれる様子もない。もう少し抗議してもいい場面だが、白蓮は何も言わず歩き始める。男も、それ以上はなにもすることなくついていく。

「こちらです」

六畳半の客間には、い草と抹香の心安まる香りが漂っている。使う機会はあまりないが、寺の面々が丁寧に掃除しているのもあり、塵一つない。清廉な空間だ。さっと襖を閉め、魔法で封印する。力ある妖怪でなければ、干渉することはできない。

男は、何事もなかったかのような顔をしている。きつと睨み付け、言い立てる。

「どういうおつもりですか。誰が見ているとも分からないところでは困りますと、以前もお伝えしたではないですか」

「ふむ？ 何のことでしょう。まるで私が何かしたようにおっしゃる。心外ですな」

なんとも白々しい物言いだった。こちらが強く出られないのを分かっているの言い草だ。

卑劣で下世話。これが彼の本性だ。だから付き合うべきでないのだが、金銭・人的面で、

命蓮寺が彼から相当な利益を受けているのも事実。いかに人間性が不愉快でも、うかつに関係を切ることはできなかった。

また、白蓮個人も、他の誰であつても提供できないものを、彼から与えられている。

「では白蓮殿、〃修行〃の成果を見せていただけますかな」

「……分かりました」

字面にはまだ柔らかさがあつたが、声色は有無を言わさぬ、高圧的なものだ。命令以外のなにものでもない。問答は終わりだと言わんばかりだ。

強引に話題を断ち切られては、追求することもできない。白蓮はただ従うしかなかった。

「どうぞ、私の修行の成果を、ご覧下さいませ」

言いながら、ローブの裾を掴まみ上げる。滑らかな指先で、ゆつくりと持ち上げていく。隠すべき肌が、露わになっていく。男と二人きりだというのに、大胆な行動だった。

ふくらはぎや太腿は、以前の宗教戦争であれほどアクティブに動き回っていたことから想像もつかないほど白い。そしてなにより、むちむちとしていた。足技を得意とする彼女なので、大腿四頭筋・ハムストリングス・内転筋とよく鍛えられている。その上から脂肪をほどよく纏うことで形成される、魅惑の脚部だった。

匂い立つほどに女らしく、色っぽい生足だ。男から向けられる視線は、ねっとり濃い。

露骨にも限度のある態度だが、白蓮は咎めない。

大胆どころではないところまで、彼の視線の下にさらされている。なおも手は止まらず、裾を持ち上げ続ける。そうしてとうとう、やんごとなき部位までもが露わになった。

法衣の上からでも分かるくらい、彼女の下半身はむっちりとしている。豊かに広がった骨盤は、子を成すのに最適なものだ。尼僧という色事と無縁の身分ではあるが、たつぷり肉を纏った様からは、性的なものを連想せずにはいられない。

下腹の三角州が露わになった途端、濃厚な女の匂いが周囲にまき散らされる。畳張りの客間の清廉な雰囲気に似合わぬ、卑猥な臭気だ。いうまもなく、白蓮から漂ったものだ。

そのことを裏付けるように、秘唇は卑猥な様を晒していた。既に、一目見て分かるほど濡れそぼっている。粘膜がぬらぬらと輝いているのがはつきりと分かる。快楽を期待しているかのようにひくついている。楚々とした尼僧の恥部だとは、到底思えぬ淫靡さだ。

陰毛ははしたない蜜に濡れ、てらてらと輝いている。ふさふさと生い茂っているのは、身だしなみにも気を配る彼女にしては珍しいことだ。剃らないようにという命令を、愚直に守っているからだ。

ローブをたくし上げただけでそれらが見えたのは、白蓮が下着を身に着けていなかったからだ。無論、彼女にそんな趣味はない。やはり、命令されてのことだった。

「これはこれは、とんでもなく卑猥ではしたくない。まるで娼婦のようだ。言われたことがおありでしょう、男の上で腰を振っているのがお似合いだと。ええ？ どうなんです」

失礼どころの騒ぎではない問題発言だ。相手が誰であつても許されるものではないし、暴露すれば彼は社会的信用を失うだろう。それでも、白蓮は咎めなかった。屈辱混じりの羞恥に顔を赤らめながらも、唇を引き結んでいた。

「まあ、よろしいでしょう。次は後ろを見せなさい」

「はい……うう！」

くると振り向くなり、尻肉をびしゃりとやられた。戯れ程度のもので、痛くはない。だが、この歳になつて、おしりぺんぺん、されるのは、心にくる。

「ふうむ。相変わらず、とんでもないデカケツだ。だらしない限りですなあ」

しみじみとした男の呟きは、半分だけ正しかった。正しいのは、とんでもないデカケツだということ。正しくないのは、だらしないということだった。

白蓮は、法衣の上からでも分かるほどに豊かな体をしている。当然、尻も例外ではない。大臀筋の上に脂肪がたっぷり乗つかることで、存在感のある臀部を形成していた。

だから、とんでもなくデカいというのは正確な表現だ。しかし、だらしないというのは大間違いだ。なにせ彼女の尻は、これだけの質量・サイズでありながら、まったく垂れて

も崩れてもいないのだから。

どちらかといえば、むちむちとしながらも美しい、満月のような曲線を描いてすらいる。白い肌に包まれて、ぷりんつ、と自身を主張している。心地よい張りのある弾力は、脂肪と筋肉のマリアージュによつてのみもたらされるものだ。まさに理想の輪郭だ。これでもだらしないうのならば、世の中の尻全てをだらしなうと呼ばねばなるまい。

「どらどら、ほほお、これはまた、随分と」

男は目をいやらしく歪めながら、目の前の肉塊を当然のように揉んでくる。両手で左右の尻たぶを、円を描くように。

豊満な桃は当然、成人男性の掌であつても余る。指を受け入れながらも押し返し、形を柔軟に変えている。欲情を誘う、卑猥な光景だった。

「っひ」

尻の谷間を割り開かれる。普段外気に触れないところに空気が流れ込み、ひんやりとした感覚に襲われる。腰をぞくりと震わせ、喉の奥から吐息を漏らす。

むちむちとした肉を男は平然とかき分け、秘められるべき肛門を露わにする。本来なら出口であるはずの穴には、異物がねじ込まれていた。男根を模した、黒光りする張型だ。白蓮の感じる強烈な羞恥によつてか、肛門はときおりヒクついている。張型も、合わせる

ようにもごもごと動いていた。

「ほう、言いつけどおりにしていたようですか？」

「はい、言われたとおり、一週間入れっぱなしで過ごしました……」

蚊の鳴くような声で答える。尻穴に物を入れているのを見つめられているという、異常きわまる状況に、顔を赤らめながら。

張型を肛門に入れたまま過ごす。それが修行の、一つ目だった。

当然、日常生活には支障をきたす。人前でうっかり落とすわけにはいかないのです、常に括約筋を締める必要がある。だがそうすると今度は、アヌスの神経を張型が刺激してくる。どろどろとした背徳の官能に責め苛まれ、達してしまったことすらある。

これはなにも、彼女が軟弱なのではない。玩具が凶悪なのだ。なにせ歩いただけで擦れ、甘い官能をもたらしてくるのだから。今週ほど声を押し殺して過ごした日々を、彼女は他に知らなかった。

「どれどれ、事実かどうか確認しましょう」

「う、ひつ、は、あ、くうっ」

男は当然のように、玩具を弄んでくる。背徳の門から生える異物を摘まみ、ゆっくりと、軽く抜き差ししてくる。異物感に、思わず声を漏らしてしまふ。

「ほほお、ずいぶんとケツ穴が吸い付いてきますなあ。脂のぼつてり載つた、素晴らしく卑猥なアナルだ。入れたままにしてしつかり躡けておかないと、なかなかこうはならない。約束はきちんと守つたようですな、大変結構」

男は深く頷いた。大黒様そっくりの笑みを浮かべているが、目には悪意が浮かんでいる。「で、では、抜いても？」

「おっと、それはまだなりません。白蓮殿も、抜きたくないのでは？ 一週間もこのまま過ごしたなら、もうすつかりアナルの快感に病みつきでしょう」

「そんな、まさか」

否定するが、男はニタニタと笑うばかりだ。見透かしているぞ、とでもいうように。

「一つ目はよろしいでしょう。合格と致します。もう一つの修行はどうなりましたかな」
気色の悪い笑顔を貼り付けたまま、男は問い掛ける。言葉通り、課せられた修行は一つではない。もう一つも大変に屈辱的で、僧侶としての尊厳を踏み躪るものだった。

口は重たかった。絶対に言いたくない。だが、さつさと報告しろと言わんばかりに尻を揉みしだかれては、正直なところを口にせずにはいられなかった。

「はい……言われた通り、一日一度、必ず自慰していました。くださった張型で、お尻の穴を、しつかりと耕してまいりました、ああ！」

途端、尻を叩かれる。先ほどとは違い、鋭い一撃だった。むちむちとした尻肉が、平手の衝撃で軽く波打つ。男は露骨に溜息を吐く。なんて出来の悪い奴だ、と言わんばかりに。「やれやれまいったく、何がお尻の穴ですか。そのようなお上品な呼び方を、いったい誰が許しましたか？ あなたのような女が使うのに相応しい言葉をお教えしたはずですが」

「し、失礼しました、……けっ、ケツマンコ、です。ケツマンコを、いただいた張型で、毎日毎日ほじくりかえしました、言いつけ通り、果てるまで。もういいでしょう？」

「ふうむ。まあ、いいでしょう。今のところは」

何故こんなどうしようもないことを言わなくてはならないのかと、涙が浮かんでくる。羞恥に堪えかね懇願する。

男は若干不承だという雰囲気を残しつつも、頷いた。いつかもつと下品なことを平気で言うようにしてやるぞと考えているに違いなかった。

ご覧の通り、白蓮は男に弄ばれている。知り合った当初から舐め腐った態度だったが、今のように肉体の関係を持ち始めたのは、三ヶ月ほど前のことだった。

白蓮とて女であり、体が昂ぶることもある。どうしても堪えかねて、自慰に至ることもある。運が悪かったのは、彼に見られてしまったことだ。最大級の弱味を握られた白蓮は、言いふらさないことと引き換えに、修行と称した性的調教を施されている。

それも、近頃はとみにエスカレートしつつあった。日常生活に影響するような命令は、立場上困るというのに。断れない自分でもどしどしかった。

「では、いつも通り、そのド助平な体を晒していただけますか」

「あの、それは……」

「それは、何です？」

男の目がぎよろりと蠢く。まさか逆らうのか、と言わんばかりだった。逆らえばお前の社会的信用は失われることになるぞ、と。

「いいえ、かしこまりました。どうぞ、私のはしたない体をご覧下さい……」

脅しに屈するのに慣れている自分に嫌気が差す。それでも、拒否はできなかった。醜聞を広げられるのも、寺への援助を打ち切られるのも、どちらも困る。自分は命蓮寺の住職であり、何人もの信徒を導く立場だ。彼ら・彼女らのためなら、嫌なことも呑み込まねばならない。男の視線の前で、己の衣服に手をかけ、自ら剥ぎ取っていく。

柔らかな曲線を描く、美しい肉体だった。女として熟して、むっちり、ぽってりとしており、大変に肉感的だ。子を孕み産み育む、母たる性別であることをはっきり感じさせる、神聖で慈愛に満ちた体つきだ。菩薩のごとくとは、まさにこのことだった。

同時に、尼僧にあるまじき色香もむんむん漂わせてもいる。彼女がいるだけで、ここが

神聖な寺院でなく、売春宿だったかのような錯覚を抱いてしまいそうになる。

娼婦のようだと言われたことがおありでしょう、という男の言葉も、あながち間違っていない——いや、やはり大間違いだ。彼女は絶対に、売春宿で客を取る娼婦などではない。色町では、これほど美しい女は決して見つからないからだ。

そう、白蓮は美しい。老若男女を問わず評判の良い、おっとりした顔つきは言うまでもない。慈悲を讃えた瞳に、すらりと通る鼻。ふつくらと柔らかな唇。外を歩けば、十人中十人が振り返るほどだった。

体つきもそれに見合うだけのものだった。相当な脂肪を纏いつつも、崩れることがない。女らしい体つきとして認められる、ぎりぎりのラインを攻めている。それこそ、法衣の上からでもはつきりと分かるほどだ。この体つきを見たいと法会に通う者も少なくはない。

そしてなにより、肌が際だって美しい。寺の住職としてあちこち出掛け、弾幕ごっこで激しく動き回るといふのに、よく手入れされ滑らかだった。しかも、日頃法衣に守られているために、透き通るように白い。女性であれば嫉妬せざるにいられないようなものだった。そんな体が、下卑た中年の目に晒されている。他の男に対する優越感を目にありありと浮かべながら、彼は白蓮を頭頂から爪先まで余すところなく眺めていく。

なめらかな首はほっそりと白い。普段露出の少ない衣装を来ているが故に、印象に残る

部位だった。なだらかな肩と鎖骨と、非常によく調和していた。

胸当てやサラシ、ブラを着ける習慣が白蓮にはない。それで本当に大丈夫かと問いたくなる乳房が、首から視線を下らせると目に飛び込んでくる。

なにせ、相当にゆったりした法衣の上からでも分かるほどの巨乳なのだ。露わになつてみると、着衣のときよりさらに豊かだった。釣り鐘のような重量感ある輪郭で、いくらか自重によつて下向いている。それでも瑞々しく張りがあり、形の崩れるところが一切ない。堂々たる、Hカップのバストだ。驚づかみにしてもなお肉が余るほどのサイズ感だ。

乳輪は広めで、色はやや濃い。他人と比べればそこまでもないのかもしれないが、肌の色の白さゆえ、非常に目立つ。乳首も大きめで、饅頭を潰したような形だった。

本人が意識しているか否かにかかわらず、なんとも卑猥ではしたくない乳房だ。男ならば誰であつても、無意識のうちの手を伸ばさずにはいられないものだった。

腹回りは、脇腹を摘まめるほどに脂肪を溜め込んでる。体全体のむちむちした印象は、確実にここに由来している。なのに同時にくびれてもおり、肥えているという印象を与えない。まさに、人体の不思議だった。

気をつけなくてはならないのは、不思議なのであつて、不自然ではないということだ。彼女の体つきは極めて自然で、人体のもつ素朴な美しさを極限まで、わざとらしくない形

で際立てたものだった。

そして、下腹だ。とろとろに濡れそぼっているのは、もはや言うまでもない。今も、奥から奥から溢れているようだった。男の視線がそこで止まった。羞恥に顔が染まり、肌もほんのりと朱色を帯びる。それでも、淫蜜の分泌は止まらない。むしろ、見られているという意識に、より溢れてくるようにすら感じられた。

「ふむうう」

男は屈み、秘唇を下から見上げてくる。ギラついた視線を容赦なく向けてくる。鼻先がやんごとなき裂け目に触れそうなほどの近さだった。

命じられてもいないのに、彼が見やすいよう、自ら脚を上げ、腰を突き出す。あまりに大胆な行為だが、まだ終わらない。この程度を大胆と表現していたら、次の行動には腰を抜かしてしまふだろう。

「どうぞ、私の純潔をご覧になってください……っ」

綻ぶ淫花に指をかけ、あろうことか自ら割り開く。ヒクつく肉洞の全てを、下衆な男の視線に晒してみせる。

ねちゃ、と、糸を引くような小さな音がした。彼女の貞操が暴かれる音だ。その奥には、純潔の膜がある。卑猥な汁にまみれ、ぬらぬら妖しく輝きながらも、無垢な様を見せていた。

三ヶ月ものあいだ辱められながらにして、彼女は未だ処女だった。最初の頃、姦淫だけではどうか許してほしいと懇願したのだ。仏に仕える身である以上、清らかさを捨てるわけにはいかないのだと。

下衆の極みたる彼相手に、ダメ元の要求だったが、意外にも受け入れられた。どういう思惑があるかは不明だが、とにかく処女だけは守られ続けていた。

「っ、は、あ、ああ、いけません、あ、あ」

もつとも、それは処女を失わないで済んでいる、というだけの話でしかない。その他の行為は、散々に仕込まれていた。たとえばそう、秘部を舐め上げるといふ行為などだ。

中年男の舌が、裂け目を這う。くちやッ、くちやっつと、口を開けて飯を咀嚼するような音が響く。白蓮のあられもない声が続く。抑え気味でこそあるが、それが嬌声であることは疑いようもなかった。熱い吐息が、艶めく唇の隙間から漏れてしまう。

口腔を用いた行為など、白蓮の時代は狂気の沙汰だった。当初は抵抗感もあった。だが、処女を許してもらったのだからという負い目が、彼女に確たる抵抗をさせなかった。

「ぢゆる、れるっ、れるれるれる……むちゅうう」

「ふうっ、あ、は、ひっ、はあ、ああ、そんな、あ、あ、あ！」

おかげで今では、クンニリングスの官能を体にすっかり覚え込まされてしまっていた。

少し舐められただけで蜜をあふれさせ、膝をカクつかせてしまふほどに。

「ひっ、は、ああっ、は、っ、はあ、はっ、い、あ、はっ、あっ！」

彼女の陰核はぶっくりと膨れ、秘貝の端でてらてら輝きながら自己主張している。よく目立っており、本人も気にしている。彼女の最大の弱点の一つだ。

唾液をたっぷり纏った舌の先端が、神経の集中した性感帯をぬるぬると転がして回る。舐められる甘い快楽に痺れるような刺激が混じり、背筋が反る。呼吸は浅くなっている。

「れるおっ……れるれるれる、ぢゆるり」

「っあ——っ、は、っ！ くッ、んッ、ふ、ああっ、あぁ！」

彼はさらに、舌を尼僧のはしたない裂け目へ潜り込ませる。襞を一枚一枚めくるように、体内で舌先を踊らせる。たまらず髪を振り乱し、詰まったようなよがり声を漏らす。

処女を許すというのは、臆を責めないということを意味しない。白蓮は未だ清い身だが、その下半身——膜より手前は、もはやどうしようもないほど淫らに仕立て上げられていた。

「お願いします、こ、これ以上は、どうかあっ……！」

男の肩をぎゅうと掴み、懇願する。膝がしきりにカクつき、脚が言うことを聞かない。体重の三分の一ほどを、彼に預けてしまっている状態だ。これ以上されたら、立つこともできなくなってしまう。通じたか、彼は顔を離してくれた。

「ムム、この程度で限界とは。とんだチヨロマン女だ。尼君がそんなことでよろしいので？」
声には嘲りの色が浮かんでいた。白蓮の側はそれどころでなく、くたりと崩れる。

クンニリングスの時間は終わったが、だからといって、これだけで許されるわけもない。むしろここからが始まりだと、逆三日月に歪む目は語っていた。

「まだ男を知らないというのに、いやらしい女だ。こんな雌穴は、色町にもそう転がっておりませんぞ。寺の面々が知ればどのように思うでしょうなあ？」

「お願いします、彼女たちには手を出さないでください」

「ええ、ええ。もちろんですとも。しかしまあ、世の中に絶対というものは無いものです。ついうっかりということもあるでしょう？ そのような悲しい結末を防ぐには、白蓮殿のご協力が欠かせないのですよ。たとえば、浅ましく自慰にふけるとかね」

「じ、自慰って、ここですか」

「ええ。もちろん。他にどこがありますか。オナニーはお得意でしょう？ 私があなたのいやらしさを知ることになったのも、それがきっかけなのですからな」

やはり、拒むことを許さぬ声色だった。やらねば言いふらすぞと、目は語っている。

「……分かりました、どうぞ白蓮の自洗を、ご覧下さい……ッ、は、ああ……」

ためらいながらも、彼女は自らの股座に指を伸ばしていく。中年の唾液混じりの秘部に、

白い指で触れる。ぷっくり充血した肉の真珠を、くりくりと優しく転がしていく。痺れるような性感に、切なげな声漏れる。

「あ！ はっ、ああ、ん、くふ、ああ、は」

もう片手では、たっぷりした乳房を自ら弄んでいく。やわやわ揉みしだきながら、先端の尖りを親指と人差し指で摘まむ。ダイヤルするように、くにッ、くにっ、くにっ、とこねていく。甘い性感が混じり、声のポリウムが一段あがる。

心を許さず、交際すらしていない男の前で、痴態を晒している。とんでもないことだ。特に、身持ちの堅い白蓮からしたら、消えてしまいたいほどの異常事態だった。それでも、こみ上げる官能はごまかせない。覚えるはずの自己嫌悪は、甘い快感に上塗りされている。そんな彼女に、男は厳しい声を投げかける。

「いったい何をしているのですか。そんな小便臭い娘のするようなオナニーは、あなたのような淫乱には似合わないと言ったと思いますかねえ。あまりつまらんことをされると、あなたについての悪い噂が、人里で出回ることになりますか？」

「な……ご、ごめんなさい、どうかそれだけは」

「ふん。またアレをしなくてはなりませんかねえ」

青ざめ、頭を下げる白蓮に対し、男はわざとらしく溜息をついた。

アレ。

その二文字が示す行為を彼女はよく理解している。同時に、喉から唾が湧いた。

白蓮が自らの反射的反應を恥じるよりも先に、彼は動いていた。

男は立ち上がり、衣服をさっさと脱ぐ。上も、下も、当然禪もだ。露わになった肉体は、白蓮には不釣り合いなものだ。胸に筋肉はなく、贅肉が見苦しい。内臓脂肪あふれる腹はでっぷり垂れ下がっている。だが、彼女の視線はそんなところには向いていなかった。既に勃起したソレは、中々の大業物だった。全体では二〇センチを軽く超えるほどだ。龟头は広く張り出し、竿は黒々として反り返っている。幹には歪な瘤が、ボコボコと輪郭を浮かべている。真珠を埋め込んでいるのだ。陰毛はもさもさと繁り、無闇と大きい陰囊が自己主張している。

中年男の強烈な性欲を具現化したかのような、凶悪で、ねじくれたペニスだった。女をよがらせ、肉の悦びを刷り込み、いやらしい淫乱女に仕立て上げる。そういう目的のため存在する、まさしく魔羅だ。ソレを見ても、逞しいとか、雄々しいという印象は受けない。どちらかというと、卑劣、卑怯、下衆、えげつない——そういった感想が浮かんでくる。

本来なら、僧が調伏すべき、邪なるものだ。そうでなくても、男性の股間など、じっと見つめるべきものではない。だというのに彼女の目は、そこに吸い寄せられていた。はっ、

はつと、呼吸は浅くなっていた。

「そおら、白蓮殿の大好きなモノですよ」

男はあろうことか、勃起した魔羅を晒したまま、白蓮の眼前に立つ。彼女は男のソレを眺めたまま呆けていたが、無意識のうちに動いていた。つまり、四つん這いになったのだ。「おやおや、何も言われずに雌犬の姿勢とは。白蓮殿も、ようやく自分の立場というものが理解できてきたと見える。上々ですなあ」

そのまま彼は、彼女の眼前で屈み込んだ。ちようど、慈愛を讃えた美貌の前に、肉竿がくる形だ。恐ろしいほど近い。ともすれば、鼻筋が竿に触れてしまいそうな距離だった。

「ああん……」

視界に大写しになった、中年のペニス。悪夢である。だというのに彼女は、危険な薬をキメたかのように顔を蕩かせていた。瞳孔は開き、口元はふにやりと笑みを浮かべていた。「あ、は。この、臭い、ああ」

陶然と呟く。鼻孔が、あろうことか蠢いている。すん、すんと魔羅の臭いを嗅いでいる。にちッ、にちつと水音がした。白蓮が太腿を擦り合わせていたために鳴った音だ。普段の楚々たる彼女の様からは、想像もつかないことだった。

調教のたび、何度も絶頂するまでオナニーを披露させられてきた。そしてその際、彼は

必ず、今のように肉棒を差し出し、嗅がせてきた。

最初は白蓮も嫌がった。自慰を見せるだけでも恥ずかしいのに、汚いし臭いしで最悪だと思っていた。だが、何度も繰り返すうちに、嫌悪は別の感情に変わる。快楽と臭気が、彼女の脳の中で一つのものとして結びつけられた。刷り込みが行われたためだ。

おかげで今の彼女は、肉棒の臭いを嗅ぐだけではしたなく発情するまでになっている。この特有の蛋白臭を嗅ぐだけで、オナニーせねばとカラダが訴え始める。

「はあーっ、はあ、ああ、ああ、ああ……く、んうッ！ お、んう、あはあッ！」

ケモノの姿勢のまま、彼女は手を、己の臀部に伸ばしていく。たっぷりした尻肉の狭間、菊門にねじ込まれた玩具へ。指先で摘まむと、己を貫くソレを、あろうことか抜き差しし始める。ぬぶぬぶと音をたてて、玩具が彼女の菊座を觸る。

特に慣らしもなかったが、問題はない。一週間入れっぱなしの生活で、アヌスは散々に躰けられていた。出て行ったものが戻ってくるという、本来ならあり得ない動きを直腸はしっかりと受け止め、あまつさえ快感を見出す。

「くふうううッ、ううんっ、ああ、ひッ、はあ、あ、あああん」

アヌスの性感は、淡くも深く、染み入ってくる、他の部位では決して得られないものだ。ほじられることで生じるえもいわれぬ切なさには、菊穴はヒクヒクヒクと収縮を繰り返し、

己を騷る玩具を締め付ける。官能が背骨から這い上り、脳を浸して駄目にしてくる。思考が甘く腐っていくのが自分でも分かる。それでもやめられない中毒性があった。

「ッはあ、おおう、ああ！ くッ、はあ、あッ、アッ、ああ！ く、ふ、んうう！」

ぬぶ、ぬぶつという粘っこい抽送音にあわせ、嬌声が大きく、はつきりしたものになる。指使いが、段々とスピードを増す。背徳の口は、異物を美味そうにしゃぶりたてている。もつともつととねだるようにヒクついている。

「あおおッ、あはあ、ッ、ひッ、は、ああああッ」

指の動きは次第に速く、激しくなっていく。本能の求めるまま、激しく己を騷っていく。「おやおや、いやらしいことだ……」

男は目を細め、眼前の光景を楽しんでいる。すなわち、たつぷりした尻が、自ら加えた肛虐によつてくねる様を。そう、彼女は腰を振っていた。体をじくじくと満たす、背徳の官能によつて。白い肌はしっとり汗ばんでおり、光を反射してきらきらと輝いている。卑猥で済む様ではなかった。

「んはあーッ、すうッ、はあッ、あはあ、臭ッ、あ、はあ、あつあつ、あはああッ」

そうして己の菊座をほじくりながらも、彼女は目の前のモノに夢中だ。鼻孔はヒクヒク蠢いて、目の前のソレの香りをたつぷり楽しんでいる。肺全体、脳味噌を犯されるような

独特の感覚に、くらくらしてしまふ。我を忘れて、官能に浸ってしまふ。体がときおり、びくつ、びくつと跳ねている。

「ッ、あ、あぁッ、っは、んはあ、はぁーあッ」

知性を腐らせるアヌスの快感、肉棒の中毒性のある臭気が彼女を狂わせる。淫らな貝が、自分も颯つてほしいというように切なげにヒクついている。太腿まで蜜が滴つては、畳に雌臭い染みをつくっているほどだ。

「ほれほれ、マンコが泣いておりますぞ。弄らなければ可哀想でしょう？ 弄りなさい」

「あはあ、はいッ」

有無を言わさぬ命令に、感謝した。彼女自身、そこに切なさを感じていた。けれども、自分から弄るのは、流石にはしたくない。その点、命令されるのはいい。やれと言われたら、外聞など気にすることなく、おおっぴらに慰めることができる。

——ああ、もちろん、そのようなことは、気が進まないけれども。

「ッ、あ、あはあ、あぁあぁ！」

淫裂に指を忍ばせる。アヌスの不定型な官能とは違う、はつきり輪郭をもった性感に、高い声がある。中指と人差し指で膣穴浅くをほじくっていく。ぐちよッ、ぐちよつと、はしたない汁の音をあげながら。

純潔は見逃す、という条件を守りながら、彼は白蓮の膣穴を責め立て続けた。三ヶ月間
躑けられ続けたおかげで、彼女のそこは、今や立派な性感帯に育っている。未経験ながら
異物を受け入れて悦ぶ様は、ある意味では姦通した穴より卑猥だった。

「はあ、ああん、アッ、ああ、くはあッ、ああ、あ、あ、あ、あッ」

「それそれ、もつと激しく。でないとなあたのような淫乱はイけないでしょう？」

命じられるまでもなく、彼女は指の動きを激しくしていた。両手で、両穴をほじくる。
その様はあまりにもどうしようもなく、尼僧であるなどはとても思えないものだった。
寺の面々に見られたら、どう思われるだろう。そんな考えが頭をよぎるが、やめられない。
「あつ……あはあ」

そんな中、白蓮の頬がむにりと歪む。こともあろうに、彼が肉竿を押しつけたからだ。
女は顔が命だという。その顔に、汚らしい中年男の性器を押しつけられている。だのに
彼女は、恍惚の声をあげていた。肉竿の臭いが、一層濃くなったように思えたからだ。頬
を通じて伝わる熱さも心地よかった。鼻孔を蠢かしながら肉穴を嬲り、乳房をゆさゆさと
揺らし続ける。

「くくく、いやあ、いい眺めだ」

「あはああ、そんな、ああ」

男は彼女の目の前で、肉竿を抜き立てる。ごしごしと抜き上げる上下動に応じて、雄のフェロモンがあたりにまき散らされる。

中年男の下半身から漂う、女殺しの性臭だ。白蓮のような発情した女が、あてられずにいられるはずもない。彼女はすっかりトリップしてしまっていた。

「ふむ、そんなにコレが気になりますか」

「あ、は」

答えなかった。イエスと応えるのはあまりにはしたくないことだと、理性がぎりぎりです待ったをかけた。もつとも、言葉でどうこう言わずとも、態度で明らかではあったのだが。「そんなに気になるなら、しゃぶればよろしい。せつかく目の前にあるのですから」

「……はっ？」

コイツは今何と言った？ 汚く、醜く、えげつのないモノを、しゃぶれというのか。

そんなことをしたことは、一度としてない。そもそも嗅ぐのだって、無茶苦茶に大胆で品のないことなのだ。そのうえ、男のモノを啜えるなど。ありえないと、理性が告げる。かつて白蓮が生きた時代、口腔での行為はアブノーマル中のアブノーマルだったのだ。

一方の男は、平然としていた。何を驚いているのか、と言わんばかりだった。

「姦淫はしないという約束ですが、それくらいは別に構わんでしょう？ ちょっと男女の

テクニクについて知っている女なら、普通にすることですよ」

「で、ですが、そんなのって」

「それに。これが白蓮殿にとっては一番大事なことになると思いますが、しゃぶった方がコイツの臭いをたっぷり楽しめるでしょうね」

「臭い、を……」

臭いをたっぷり楽しめる。

その言葉に、すっかり魔羅の独特の臭気の虜である彼女は喉を鳴らす。考えるだけで、唾がじゅわりと湧き上がってくるようだ。

いやいや、駄目だ。首を横に振る。そんな言葉に乗ったら、自分はただのいやらしい女になってしまふ。命蓮寺の住職として、受け入れられることではない。

「白蓮殿、あなた、私の言葉を拒める立場ですかな」

「嗚呼……」

男が卑劣に目を歪ませた。対する白蓮は、呆然と眩く。そんな風に迫られたら、断れない。卑劣な交渉をされながらにして、彼女はときめきを感じていた。そうだ、それが正解だ。立場を盾にしてくれたら、どんな品のないことだってできてしまふ。経を唱えるべき口で、男根をしゃぶりたてることだって——胸の疼きに、思わず唇を噛む。

そうだ、これは自分の立場上、やらねばならないことなのだ。こんなに大きくしているなんて、危ない。欲望に突き動かされて、襲いかかってくるかもしれない。そうになると、姦淫しないという約束も守ってはもらえない。

仏道にある者として、処女だけは守らねばならないわけで、危険を取り除くことは必要だ。つまり自分は、彼を口で射精させねばならない。

射精。なんとという響きだろう。くらくらししてしまう。男が欲望を解き放つ、おぞましいはずの瞬間。にも関わらず脳味噌は、それに甘美なものを見出していた。

「……そうですね、拒否する選択肢は、私にはないようです、わかりました」
「そうそう、それでよいのですよ。さあ」

肉棒が突き出される。間近で見ると、恐ろしいモノだった。赤黒い亀頭はグロテスクで、本能的な恐怖を女に覚えさせる。受け入れれば虜にされてしまう、自分が自分でなくなるという恐怖を。

けれども彼女は、漂う雄臭から逃げられない。光に蛾が吸い寄せられるように、ソレを受け入れたいと考えてしまう。

「えあ——」

口を開く。取り返しのつかないことをしようとしている。今ならまだ間に合うと理性は

告げている。だが、駄目だった。依存症状は、気合いで拒めるようなものではない。

唇を、ゆっくりと近づけていく。そしてとうとう、先端に口づけた。

むちゅっ、と音がした。彼女が唇の初めてを、汚らわしいペニスによつて喪失したこと
の何よりの証拠だ。

僧侶として堅持してきたものを、ドブに捨ててしまった。それでも、後悔はなかった。
溢れる恍惚が、負の感情を忘れさせた。

「んふああ……」

唇は肉体において特に敏感な部位だ。そんなところで女を墮落させる凶器に触れたのだ。
法悦を感じるのは当然であり、彼の思うつぼだった。

「むちゅッ、むちゅ、ちゅうう……：れる、れるおお」

一度線を越えてしまえば、あとは転げ落ちるようなものだ。肉竿の表面にキッスの雨を
降らせながら、舌を這わせていく。むちゅ、むちゅと、卑猥な唇の音が響く。御仏のため
経を読むべき舌で、肉棒をれるおおと舐め回していく。

ねっとりした唾液が、黒々とした男根に纏わり付いていく。なんとも猥褻な光景だった。
まして、それをしているのが普段清らかに振る舞う尼僧であったから、なおさらだった。

「おほほ、おお、なんとという舌使いだ。これでチンポをしゃぶったことがない？ 一体

なんの冗談やら」

男は深い息を吐きながら、腰をぞくりと震わせている。肉竿に夢中な彼女の舌使いは、彼をも十分に感じさせるものだったようだ。

だが、男の目は、未だ満足していないと語っている。嗜虐の色が浮かんでいた。

「悪くはありませんが、この程度ではまったく足りませんか？ 命令を聞いていますか、私はしゃぶれと言ったのです？ 言葉の意味は、きちんと理解していただきたいものだ」

「ああああ……」

柔らかで穢れ無き頬に、中年男のねじくれた欲望が押しつけられる。唾液にまみれた竿の熱さに、彼女は感じ入っている。言われた通りにするのに、最早さしたる心理的抵抗もなかった。

「えあ……」

大きく口を開く。寺の面々が、そんな風にかぱりと口を開けて何かを食べようとすれば、行儀が悪いですよと注意するだろう。彼女のしていることは、行儀が悪いどころではない。とてつもなくはしたなく、下品で、淫らな行為だ。だが同時に、誰もが見入るほどの魅力があった。魔性と言い換えてもいいだろう。

「あむううッ」

根元まで、一息で男根にかぶりつく。誰もが振り返る美人尼僧の口腔を、男根が埋める。とてもこれが初めての口淫であるとは思えぬ、大胆な仕草だった。胸の内で燃え上がる性への渴望が、そのような行動をとらせたのは明らかだった。

とはいえ、この程度で驚いては始まらない。何せ、今からさらにとんでもないことをするのだから。

「んふう、んぼッ、くぶ、んふう、んむ、んう、んんうう」

頭を前後させていく。ぐぼっ、ぐぶつと、口腔の端から空気の抜ける音が鳴る。時折、じゅると、溢れそうになる唾液を啜る音も続く。

「ううむむ、やはり、本性は淫乱か。これは、おお、ムう、中々」

ふつくと艶めいた唇を、彼女は惜しげもなく、口淫奉仕のために使っていた。初めてゆえに拙くはあったが、情熱的かつ熱心だ。ねっとりとしたフェラチオを、男は低い声で唸りながら受け止めている。

「くふううん……」

特有の蛋白臭が、口腔どころか肺一杯に満ちる。嗅覚は支配され、痺れるような苦みが、うつつすらと味覚にまで広がっていく。

当たり前だが、ひどい臭いで、味だ。だが、白蓮は尻を垂れ下げている。クセのある、

やみつきになる味だと感じていた。少なくとも彼女は、一発で虜になってしまっていた。

「んもッ、んう、んくう、れるおッ、もご、んふ、んん」

頭を前後させ、男根をしゃぶりたてていく。ぬるッ、ぬるるつと、埋め込まれた真珠が唇を刺激し、心地よい。だが、このように素敵なもの、ただ啜えているだけでは勿体ない。もつとしつかりと味わいたい。

本能の求めるまま、口内で舌を蠢かしていく。口腔を陵辱するモノを、れろりれろりと、ぬめる舌で歓待する。ごつごつした瘤の輪郭に沿って這わせ、たつぷりと唾液を絡める。亀頭やカリ首あたりを重点的に舐め回していく。窄められた頬が、もごもごと蠢いた。

「おっほッ、おおお、そうそう、よろしいですよ。素晴らしい」

裏筋のあたりを刺激すると、彼は腹の奥から抜けるような声をあげる。そこが彼の弱点に違いなかった。舐め回してやると、鈴口あたりから苦じよっぱい、ねつとりとした汁がにじみ出してくる。先走りだ。

「ぢゆる、んううう……」

彼女はそれを、深く味わう。尿道口——排泄口から出た他人の体液だというのに、深く深く、じつくりと。命蓮寺の住職とは、とても思えない仕草だった。

「いやあ、これはこれは、なかなかとんでもない雌の顔ですなあ」

前髪をかき上げられ、顔を覗き込まれる。

雌の顔というのがどのような顔か、彼女は知らない。が、本来なら人に見せるものではない、はしたなくだらしない表情であるのは間違いないかった。

けれど、仕方ないではないか。ペニスが美味すぎるのだ。味わえば味わうほど、熱で、臭いで、味で、己の中における存在感を強めていくようだ。これほど官能に訴えかける、中毒性のあるものを味わわされては、貞淑たる聖白蓮とて女を晒さずにはいられなかった。昂ぶる欲望は、彼女を動かす。白い両手が、股座へと伸びていく。未経験とは思えないほどヒクつく雌穴、はしたなくも異物を咥え込む尻穴を、左右の手でこねくり回す。

「んくうッ！ んもう、んむう、ン！ くっふ、お、むう、んううう」

己のしていることのもんでもなさは承知している。口淫だけなら、やらされているからと言いつてもたつ。だがこれは、自分から始めたことだ。ごまかしようがない。

けれども、指は止まらない。止まらないどころか、先ほどよりも一層激しく、己自身を撻り立てていく。

「んううッ、くふう、んんん、ふッ、あもお、お、んん、んむうう」

ぐぼッ、ぐぼッと、唇が淫猥な音を立てる。えずくような声が喉奥から漏れているが、決して苦しそうではなく、むしろ恍惚が声色に現れている。

ぐぼつぐちよつぬぢよつと、卑猥な水音が二つ響く。秘唇から飛び散る雌汁が、青々とした畳に濃い染みをつくつていく。菊穴は己を陵辱する玩具に勢いよくめぐり返されては、ねっとりした粘液音を立てている。

「おやおや、チンポをオカズにオナニーとは。……そこまでしろとは、流石の私も言つておりませんが。とうとう本性を現しましたかな？ この変態が」
変態。

悪口としても、およそ最悪の部類だ。だが、故無き罵倒ではない。そのように呼ばれるだけのことを、自分はしでかしているのだ。

そう思うだけで、もう、たまらない。口淫はいっそう熱心になる。ぢゆるぢゆると唾液の音を室内に響かせながら、大きく頭を前後させる。ひよつとこのように頬を窄めた様に、日頃の品格などどこにもなかった。

本人に自覚はないが、口淫の熱烈さたるや娼婦のごとだった。いや、娼婦以上とすらいえる情熱的奉仕だ。なんせ、しゃぶればしゃぶるほど口内の雄の存在感が強まるのだ。もつと味わいたいと思わずにはいられない。

比例して、両手の動きも激しくなる。自己の意思から独立した生物であるかのように、両穴を颯り立てていく。

「お、お、おおッ、く、上つてきたッ。雌豚が、そんなにチンポが好きなら、いいものをくれてやりますよッ」

「んもおッ」

ぶぼッ、と音がした。彼が腰を引いたのだ。肉棒にちゅうちゅうと吸い付いていた唇へ急に空気が流れ込んだことによる、卑猥なリップノイズだった。

「そおおら、ギットギットのザーメン化粧だ、お似合いでしようがッ」

「ああ……、あ、は、ああ……ッ」

素晴らしく素敵なモノが出て行ってしまったことに、一瞬だけ、寂しげな声をあげる。が、それはすぐ、至福の吐息へと変わった。

肉棒が、目の前で弾けた。溜めに溜めた欲望を、至近距離で解き放ったのだ。反射的に目を瞑る。無防備に晒された顔面へ、恐ろしく熱く、粘っこい汁がぶちまけられていく。猛烈な臭気を纏った滾るゲル、精液が。

「あはああ……ッ」

涙、汗、唾、血液、尿。なんであれ、他人の体液など浴びせられて嬉しいものではない。普通はそのはずだが、彼女は深い法悦の声をあげていた。

額に、眉に、瞼に、目尻に、頬に、鼻筋に、唇に、おとがいに、べちゃっつ、べちゃっつと、

濁液が浴びせられる。そのたびに腹の底から官能がこみ上げて、体をぞくぞくと震わせる。

「えああ……」

無意識のうちに、彼女は、口を開き、舌を突き出していた。手を添えるおまけ付きだ。すると男は当然のように、無防備に晒された口内粘膜へ、濁液をブチまけはじめる。白く濁った無数の精虫が、鮮やかなピンクの口内を汚していく。

このようなものを浴びせられて、雌にならないでいられる女などいない。圧倒的な熱に、痺れるようなえぐみに、鼻の曲がるような臭気に、彼女は屈服を思い知っていた。

「あああんツ、あは、あああああアツ……」

体が、ぶるりと震える。股穴が、ぷしい、と濃密な雌蜜を吹き出す。括約筋は収縮し、尻穴は異物をきゅううと締めてみせた。喉の奥から漏れるのは、至福の声だ。

「なんと、ぶっかけていくとは……。流石、大した雌豚僧侶のだ」

誰がどうみても、絶頂していた。中年男の男根に唇の初めてを捧げ、汚らわしい精液を顔に浴びせられ、味わわされて、彼女はアクメを迎えたのだ。罵倒の言葉すら、心地よく聞こえるほどだった。

「ん、はあ、あは」

美貌をねちやねちやと台無しにする濁液を、彼女は指先でついと掬う。あろうことか、

それを口元にもっていく。れろ、れろと、舌先を尖らせて舐め取っていく。精虫一匹まで、じっくりと味わいながら。とても尼僧の仕草とは思えない。どちらかといえば淫魔のそれだ。「はん、まったく、いやらしい女だ。そら、こちらにケツを突き出しなさい」

「はい、かしこまりました」

顔にかかるスペルマのせいで、ろくに目も開けられない。それでも彼女は、音を頼りに尻を突き出す。四つん這いで、期待するように腰をくねらせながら。躊躇いはない。己は、彼に屈服した身なのだから。

「むう、なんだこの光景は。卑猥すぎる」

「あんっ、ああ」

うっすらと汗を浮かべ、きらきらと輝く尻肉を、ペしりと叩かれる。いい年をしてお尻ぺんぺんされることへの屈辱が、彼女に甘い声をあげさせる。

「どら、ケツ穴の具合はどんなものか……」

「お、おッ、ひい」

間拔けな声が、喉奥からあがる。彼がおもむろに、尻穴にねじ込まれた玩具を摘まみ、引き抜き始めたのだ。長大なる玩具が、ヌ、ヌヌッと、尻穴から這い出していく。自分で弄るのはまた違う官能にうち震える。

「んはああっ！」

ぬぼお、と、耳裏に残る音をたてて、黒光りする玩具が全て引き抜かれる。実に一週間責めさいなまれたアヌスは、簡単には閉じなくなっている。くぼ、くぼと、獲物を探す磯巾着のように収縮しながら、ルビーのような粘膜を晒していた。

彼女は息も荒く、肩を軽く上下させている。たわわなる乳房が、ふるんつ、ふるんつと小さく揺れていた。

「いやあ、まったく、いやらしい女だ。おかげでチンポが萎えやしない。ご覧なさいよ、このとんでもない勃起を。これは、そうさせた女で発散するしかありませんなあ？」

言って彼は、己の股間を指さす。言葉通り、魔羅は先ほど射精したばかりだというのに、驚くほどの硬度を保ち続けていた。

「ッ、あ、はあ、ひッ……」

未だ絶頂の余韻に浸っているヴァギナに、肉棒が押し当てられる。思わず、息を呑む。敏感な秘唇で味わう肉棒の熱は、おそろしいほどだ。それが彼女に、ヴァージンロストの恐怖を思い出させる。

——このままでは、奪われてしまう。

「い、いけません、それは、それだけは！」

青ざめながら、彼女は両手両足をバタつかせる。どれだけ淫らに染まろうとも、処女は絶対に奪われるわけにはいかなかった。

必死な様子に、男は溜息を吐いて腰を引く。

「やれやれ。あれだけ無様にあんあんヨガっておきながら、今さら何を言っているのやら。純潔であればいいというものでもないと思いますが。まあ、そういうことなら構いません。こちらを使わせていただくだけです」

「ひええッ……?」

裏返った声があがる。なにせ彼は、こともあろうに、未だヒクついている彼女の尻穴に指先で触れたのだから。

「ま、まさか……その、ええと、もしかして、肛門で、交わると?」

信じがたい行いだった。いや、そういう行為については知っている。一部の僧侶が手を出してると聞いたことがある。だがしかし、そこは排泄孔なのだ。いくら快感を覚えるように造り替えられたからといって、きたないものがひり出される穴であるのは同じだ。

そんなところで、真珠を埋め込んだ凶悪なペニスと交わる。正気の沙汰ではない。

「そんな、そんなのは……」

肛門性交。とんでもなく墮落した行為だ。だが同時に、とんでもなく心を惹かれていた。

想像するだけでアヌスが未知の快樂に疼き、味わいたい欲求を抑えられなくなるほどに。

——ああ、けれど、自分からそんな行為を受け入れるだなんてことは、とてもできやしない。そう、自分からは。

「おやおや？　こちらが嫌だとおっしゃる。ならば、処女をいただくまでですが。チツか、ケツか。どちらかですぞ。どうします？」

「ああ……」

思わず、溜息を漏らした。

道理の分からぬ者が聞けば、彼のような下衆に弄ばれることへの悲嘆が現れたものだ、と考えるかも知れない。

大間違いだ。これは、法悦の吐息だ。このように自分から選択肢を奪ってくれることに對する、感謝を示したものだ。それしか選べないという状況は、最大の言い訳になる。

「ケツ穴での行為は、セックスとは言いません。セックスというのは、マンコにチンポを突っ込む行為ですから。セックスでないなら、別に構いはしないでしょ？　この卑猥なケツマンコで、ちよつとザーメンを処理するだけです。先ほどあなたがチンポに吸い付き、貴重なザーメンを搾り取ったのと、本質的に何も代わりはしませんよ」

「あつは、あ、お、んうツ、あはあ」

言つて彼は、無防備に曝け出された肛門に指をくぐらせ、腸壁を擦り上げてくる。もうすっかり解れきつたアヌスは、大した抵抗もなく指を受け入れ、悦ぶ。

脳を駄目にする快楽に、思考は馬鹿になる。まともに考えることができない。果たして、彼の言っていることは正しいのだろうか？ 自信満々だし、正しいだろう。

セックスで処女を喪うか、セックスでない性行為をするか。選ぶべきがどちらであるか、今の白蓮でも簡単に分かった。

「わかりました、どうぞ、聖白蓮のお尻を、お使いください」

「何がお尻だ。ケツマンコだ雌豚」

「ああッ！ ケツマンコ、ケツマンコをお使いくださいませ！」

ぴしゃりと尻肉を叩かれ、反射的に訂正する。とてつもなく下品な語彙を使わされたというのに、彼女はむしろ嬉しげな表情を浮かべていた。

「やれやれ、まったく。ケツハメ一発にどれだけ手間をかけさせるのやら。ケツ穴狂いの淫乱のくせして、貞淑ぶりおつてからに……」

「あ、は、ああ、ああんっ」

言つて男は、たつぷりした尻肉の谷間に肉棒を挟み込み、軽く前後させる。唾液まみれの肉竿が、にちゃっ、にちゃっとな音を立てる。本来なら大して気持ちよくもない行為だ。

しかし、敏感な彼女の臀部は、その程度の刺激にすら甘やかな性感をもたらした。

肉棒の熱さ、硬さ、太さを、はつきりと感じさせられる。期待が、胸を疼かせていた。

「さら、自分がどれだけの変態か、そのいやらしいケツ穴に教え込んでさしあげますよ」

「あはあああ……」

ヒクつくほぐれきった菊穴に、凶悪な肉槍の先端が押し当てられた。深い吐息が漏れる。恐ろしいほどに熱く、硬い。受け止めるには、肛門括約筋はあまりに頼りない。

「ああ、こんなの、入るわけ」

「入るに決まっているでしょうが、あんな上級者向けの張型啞え込んでよがつてたケツ穴なんです。自分がどれほど卑猥なカラダになっているか、この期に及んでも分かっていないとは。仕方ない、今から教えて差し上げますよ——そらッ！」

「あ、えッ、待ッ、あ、——あおおおおおッ！」

腰をくねらせ逃げようとす。だがそれより先に、彼は下腹を前方へと突き出していた。ぬぶりと、凶悪なる肉棒が体内へ入り込む。本来なら出す専門であるはずの狭穴を、思い切り押し広げて。

ぱん、と、軽い破裂音がした。たつぷりした尻肉と、男の贅肉あふれる腹がぶつかったのだ。一瞬遅れて、神経が焼けそうな快樂が脳髓へ叩きつけられた。今までと比べてすら

けたたましい嬌声があがった。

「ほら、入ったではないですか。だから余裕だと言ったでしょう？ あなたのケツ穴は、とつくの昔に、チンポをつっこまれてヨガる変態雌豚のソレに成り下がっているんですよ。何も心配することはないのに、それを貴様はウダウダウダウダ眠ってえことを言いおって黙ってハメ倒されていいものを、このチンポ狂いの淫乱僧侶が！」

「あッ！ はあッ、あおッ、ひいッ、んんおッ、おッ、ひ、くはッ、あおおお！」

何かとんでもなく失礼なことを言われている気がする。だが、反論できない。というか、意味を理解する余裕がなかった。

男は間髪を入れず、抽送を開始していた。それも、初めてのアナルセックスを経験した相手に対するものではない、激しい抽送を。ぱんぱんぱんぱんと、かなり速いリズムで、小気味よい破裂音が響く。たっぷりした尻肉が、下腹に打ち付けられるたび波打っている。このようなストロークをいきなり繰り返り出されて、平気でいられるわけもなかった。

「あおおッ、ひッ、ほ、おッ、は、くはッ、あおッ、おおおッ」

ぬぐッ、ぬぼッと、粘っこい水音が響く。間抜けで裏返った白蓮の声が続いた。肉棒がアヌスをめくり返しほじくるたび、腸液があたりにまき散らされる。唾液でヌルついた竿が入り込むたび、埋め込まれた真珠が菊門をヌププッ、ヌププッと刺激してくる。

白蓮はひたすら目を白黒させていた。体内で、ごりごりと音が聞こえる。腸壁を、男のねじくれた欲望が抉っている。脳味噌が腐り果てるような強烈でえげつない快感が全身を駆け巡る。逃げ場がない。ひたすらに狂わされ、よがらされることしかできない。

「そらそら、まだまだこんなもんじゃないぞお」

「あああッ、あひっ、ッほ、おッ、おおおんッ」

意識が揺さぶられる。がくがくと、体を震わせる。張型で慣れているだろうなどと彼は言っていたが、本物の肉棒はあんなのとは比較にもならなかった。玩具は結局、玩具だ。硬く熱い男の象徴で穿たれるのは、オナニーなどとは比較にもならない。

「おおッ、おおん、あおッ！おおお、ひッ、くっふううッ！」

ぎりぎりまで広げられた肛門は、気の狂いそうなほどの快感を叩きつけてくる。ぶぽッ、ぶぽぽと、抽送のたび間抜けな音が鳴る。どこの獣が発情期を迎えたのかというような声をあげて、白蓮はよがる。

先ほどペニスをたつぷりしゃぶり倒した口の端から、白濁まじりの涎が垂れる。それを拭う余裕すらない。雌豚の姿勢を取りながら、ぐぼッぐぼッと卑猥なアヌスをほじくられ、よがり狂うばかりだ。

「あああッ、ケツマンコ、ケツマンコすごいいいッ、あッは、おひッ、ひい、あおおッ！」

彼女は既に、アナルセックスに夢中だった。髪を振り乱して悶える。誰かに聞かれたとして、聖白蓮が言ったとは思わないような言葉を垂れ流しながら、よがりまくる。

さらには自らも、腰を振りたくり始めた。たつぷりしたヒップが、縦横無尽にくねる。溢れんばかりの乳房が、ぶるんぶるん卑猥に揺れている。全身に浮かぶ汗が、きらきらと光を反射している。

尼僧と呼ぶには、あまりに卑猥な様だった。娼婦と呼ぶにも無理があるほどだ。まさに雌豚と称するに相応しい有様だった。ケツ穴をほじくられてよがる、変態の雌豚だ。

「おお、おお……ッ、そんなにチンポがいいか、この、淫乱が、ええ!？」

貞淑で知られる尼僧をそこまで墮としたことに、彼も強烈な情動を覚えたらしい。卑猥なる様に息を呑みながら、嗜虐を浮かべた声で責め立てる。

「何だその様は。まったく、住職のくせしてその態度、恥ずかしくないのか。ふわふわと脂の乗った、締め付けてくるケツマンコをしておいて、なあにが僧侶だ。調子に乗るな。お前のような女は、本来マンコされるのが当然なんだぞ、わかっているのか、ええッ!」

「あああッ!」

ぱしいんツ、と、馬を鞭で打つような鋭い音が響いた。尻肉を、平手で打たれたのだ。それも、今まで何度かされていたのとは違う。臀部に掌の痕が残る、強烈な一撃だった。

「あ、あ、いけません、あおッ、ひいッ、ひい！」

痛み混じりの快楽に、彼女は背を震わせる。逃げるように尻を振るが、その姿はむしろ誘っているようだ。彼にもそう見えたらしく、次から次に鋭い平手が繰り出される。ぱし、ぱしいッと、次々繰り出される手に悶えるばかりだ。

「淫乱な貴様のために、廊下でせっかくケツを撫でてやったというのに、こともあろうに困りますと言っておったな。人の親切を踏み躪り、カマトトぶりおって、そんな理屈が通用するとも思っているのか、ええ!? アアッ、貴様のような生意気な淫乱には罰が必要だ。オマンコだ、オマンコさせろ、オマンコだ！ 聞いているのか聖白蓮、この雌豚がア！」

「ひいーッ！」

オマンコ、オマンコと喚きながら、平手を繰り出してくる。何度も叩かれたことで、尻は猿のように赤くなっている。痛覚は鈍麻し、代わりに、甘やかな性感が下半身を満たす。もちろん腰使いも止まってはいなかった。下半身の苛立ちを思い切り載せた、重量級のストロークだ。そんなピストンを前に、彼女のAnalに許されたのは、ただひたすら蹂躪されることだけ。叩きつけられる性感を、脳へ伝えることばかりだ。

「分かるか？ ここだ、ここにハメさせると言っておるんだ、分からんか雌豚アッ」

「あ、あ、あああッ」

駄目押しに彼は、無防備に曝け出された毛深い秘唇へ指を潜り込ませる。ぐちよぐちよと乱暴に引っかき回す。純潔の膜を、今すぐに破らせろというように指先でこねくり回す。「ひッ、ひいッ、あ、あ、あああッ、お、いいッ、ああ、いいッ、ひいッ、ひいッ」

白蓮は涙を流していた。酷いことをされて悲しいからではない。次々に与えられる官能のすべてが、あまりにも良すぎたからだ。辛いものを食べたときに涙がにじむのと同じ、度を越した感覚に対する生理的反応だった。

「堪忍、堪忍してください、姦淫だけは、おまんこは、ああああ、許してえッ！」

快感という生き地獄の前で、ただ喚くことしかできない。貞操を守らねばという意識を保っているだけ立派というものだった。もつとも、この状況でそんな懇願をしても、彼を逆上させることにしかならないわけだが。

「なんだと!? ケツ穴をほじられてヨガリ狂うド淫乱が何を偉そうなことを！ そんなに言うなら、これからもケツマンコさせろッ。私が求めたらどこでも素っ裸になつてチンポをしゃぶれッ。二四時間三六五日、私とケツマンコだッ。景気づけにまずはこのド変態のケツ穴に種付けしてやるッ、どうだ！」

「そッ、そんな、そんなのおッ」

断じて、受け入れるわけにはいかない。自分は命蓮寺の住職であり、立場も、導くべき

者もいる。それを放り出して、彼の奴隷のような立場に墮ちるなど、受け入れられない。たとえどんなに惹かれていたとしても。ケツ穴に種付けという言葉に、背徳の穴が疼いたとしても。受け入れるわけにいかない自らの身を、もどかしく思ったとしても。

少なくとも、自分からは。

「嫌だとも言うつもりか!? ならオマンコするぞ、いいんだなッ。ここでヴァージンを喪うんだぞ、住職辞めることになるんだぞ、それでいいんだなッ、ええッ!?!」

「あ、嗚呼……」

膣穴に潜り込ませた指先で、純潔の膜をなぞってくる。コレを失うことになるのだぞと。そんな風に脅されたら。どんな卑猥な要求も、受け入れるしかない。まったく、なんて便利な言い訳だろう。彼に感謝したくて、たまらない気持ちだった。

「あはあッ、わかりました、わかりました、いつでも私のケツマンコをお使いください。私聖白蓮は、ケツマンコにチンポを突っ込まれてよがり狂う淫乱変態雌豚でございますッ。こんな私の無価値なケツマンコに、どうぞあなた様の貴重な濃ゆいザーメンをぶちまけて。ケツマンコにたっぷり種をつけてくださいませえッ! ——ッ、アア……」

とうとう、言ってしまった。

おろしたての服で泥田んぼに飛び込むようなやけっぱちな快感が、彼女の胸を満たす。

悪魔のような取引を受け入れさせられたというのに、彼女の口は、無意識のうちに笑みを浮かべていた。きゆううと、尻穴が肉棒を締め付けた。

「そうかそうか、つまり貴様は道理の分かる雌豚だったんだなッ。アドリブまで入れて、最高じゃあないか！ よし、そこまでいうならブチまけてやるぞ、お、お、おおっ！」

どんどんと、ピストンが激しくなっていく。男が獣のような呻き声をあげると同時に、とどまるところを知らぬ獣のようだった腰が、尻にぴったり密着する。肉棒が、根元から先端まで直腸を埋めると同時に、炸裂する。

次の瞬間、尻穴にマグマが流れ込んだ。少なくとも、白蓮はそう感じた。無数の精子がこの女を尻穴狂いの雌豚に堕としきつてやるのだと、張り切つて鞭毛を蠢かす。その熱のすさまじさゆえ、溶岩を注がれたかのように感じたのだ。

彼らの目論見は、開始前からほぼ達成されているも同然だった。なにせ白蓮は、人生初の肛内射精を受けて、激しく絶頂していたのだから。

「あつはっあああああッ！」

脊椎が折れそうなほど背を反らす。放埒な乳房がばるんッ！ と跳ねる。汗が額から、珠のように弾ける。濃厚なスペルマに征服された腸壁が、菊門が、降伏宣言のように肉棒をきゆうきゆうと締め付ける。前穴からは、快楽を歌い上げるように、雌穴がぶしいっと

噴き出した。

目の裏が白く染まっっていく。甘く腐る背徳の官能に、五感までもが蕩けていく。おほお、と声を漏らした彼女に、もはや清楚さなど欠片も残っていない。ここにいるのは、一匹の雌豚だ。無垢なるまま墮落した、尻穴狂いの淫乱だ。こんな快樂を知れば、もう戻れない。不祥事を言いふらされたくないから調教を断らないなど嘘だ。断りたくないだけだった。だがもう、どうだっていい。これからはただ、彼にハメ倒されるだけの日々が待っている。

「おッ、おお、くう、絡みつくううッ……」

「はひッ、はへ、はあ、あは、ああ、ああん……」

ようやく長い絶頂が終わる。二人揃って、畳にぐったりとうつ伏せる。

清澄だった部屋には、むせ返るほどの淫臭が満ちている。畳はいろいろな汁にまみれ、もはや張り替えねばどうにもならないほどだった。

「やれやれ、全く、どれだけザーメンを搾れば気が済むのやら」

やがて、回復した男が肉棒を引き抜く。ぬぽおと、独特な粘っこい音がした。散々欲望を放ったイチモツは、腸液と白濁に塗れてどろどろだ。

対する白蓮は、夏に畦道で潰れている蛙のようになっていた。散々叩かれた尻は、猿のように真っ赤になっている。ほじくり返された肛門はめくれ返って粘膜をさらし、ぶびッ、

ぶびびっとどうしようもない音をたてて白濁をこぼしていた。

「おい、起きろ」

「ひんッ」

ぴしゃりと尻を叩かれ、彼女は覚醒する。眼前には、粘液塗れのペニスが晒されていた。肉棒本来の臭い以上の、強烈な臭気を放っている。腸液の臭いだ。

「貴様のせいで汚れたぞ、雌豚。どうするんだ？ その色狂いの小さい脳味噌でも、約束は忘れていないだろうなあ？」

「はい……もちろんです」

処女の代わりに全てを差し出す、どうしようもない契約。状況が状況だったとはいえ、己はなんといいことを言ってしまったのか。——ほんとうに、素晴らしい取引ができた。

「まずは、私が汚してしまったおチンポ様を、責任をもって掃除させていただきます」

「ふむ、流石雌豚、性行為の作法がよく分かっている……お、お、そうだそこだ、裏筋をよく舐めろ……おとおッ」

胡座をかいて座る男の股に、顔を埋める。精液と腸液ででろでろの、半勃ちのペニスをしゃぶり立て、ゆっくりと口で清めていく。ごつごつした瘤による唇への刺激が心地よい。瞳には、色情ばかりがあった。

「んむふう……ぢゆるッ、れろお、くぶッ、くぼッ、くぶッ、くぶ」

寺の面々の顔が、脳裏をよぎる。星が、代わりましようかと言って自分を庇おうとしてくれたことを。そんなわけにいかないと判断した自分は、やはり正しかった。こんなにも素晴らしいことを代わってもらうなんて、できるわけがない。

「んむちちゆ、ヂユルッ、ぢゆぶ、ぐぼッ、んふ、んううう……」

未だ余韻に浸る両穴を自ら掻き回しながら、彼女は男のモノを口腔で慰め続けた。